第１部　基調講演

「思いやりの心を育むキャンパス」

龍谷大学　学長　入澤　崇

入澤

皆さん、こんにちは。学長の入澤です。

今日は、障がいをお持ちの方と障がいを持っていない方との垣根を取り払いたいと思っています。

まず、龍谷大学が仏教系の大学であることから、少し仏教の話をさせていただきます。ただ、難しい話をするつもりはありません。最初に、１枚の彫刻の写真を見てもらいたいと思います。（資料参照）

これは、２世紀から３世紀ごろ、今のパキスタン北部、昔ガンダーラと言われていたところで創られた石彫作品で、お釈迦様の前世の物語を表現しています。お釈迦様が、かつてシビ王であったときの物語です。

シビ王という王様の王宮に、ある日ハトが飛んできます。ハトがシビ王に助けを求めます。「自分は今、タカに追われている。どうか助けてほしい」と。彫刻向かって左下にハトがいます。大きく表現された人物がシビ王という王様です。

次にシビ王のもとへ、タカがやってきます。彫刻上部に、表面ははがれていますけれども、鳥がいるのが分かります。タカが言うには、「今、自分は飢え死に寸前だ。今ハトが来ただろう。そのハトをどうか私の前に出してくれ。ハトを食べないと自分は死んでしまう」と。そのようにタカはシビ王に言いました。

さて、シビ王は悩みました。ハトを助けるということは、タカを飢え死にさせてしまう。タカにハトを差し出すということは、ハトを殺してしまう。シビ王は考え込みました。そして、考えぬいた結果、シビ王はどういう行動をとったか。

ハトと同じ重さの肉を自分の足の肉から切り取って、タカに食べさせればハトも助かる、タカも助かる。こう考えたのです。この彫刻作品は、シビ王のお付きの者がまさにシビ王の足の肉を切り取る寸前を表現しています。シビ王は痛がるだろうから、別のお付きの者が抱えています。そして、中央にはかりを持った人物まで表現されています。ハトと同じ重さの肉をはかりで量って、そしてタカに食べさせようとの考えが示れているのです。

この話はお釈迦様の前世の物語として非常に有名な話です。物語の最後に帝釈天という神が現れます。このハトとタカというのは、実はこの帝釈天がシビ王の心を試そうとして創り出したものでした。彫刻の右側には従者を連れた帝釈天が表現されています。帝釈天は、シビ王のとった行動はすばらしいことだと褒め称えます。自分の肉を傷つけてまでも動物を、困難な状態にいる者を助けようとしたこのシビ王の心は非常に純粋なものであるということで、帝釈天は賞賛したのでした。そして、このシビ王は生まれ変わってお釈迦様となったという話です。

私は、この作品は人類の精神史を見る上でも、非常に特筆すべき、そして大変上質な芸術作品だと思っています。つまり、困難な状態にある者（ここではハトとタカ）に対して、同じ命ある者として、自分の身を切り刻んでも手を差し伸べようとする崇高な精神が表現されているのです。こうした行為は普通できないことです。私たちができないこと、為し難いことをしたから、生まれ変わってブッダとなることができたのだと古代の人たちはこの話を伝えたわけです。

ハトの苦しみや悲しみ、そしてタカの苦しみや悲しみ、シビ王はそれをくみ取ったわけです。私たちには真似することのできない行為ではありますけれども、この話から大事なことを学びとることはできると思います。それは、困難な状態にある者も、共に命ある存在であるという視点です。力ある者、この王は弱い者を排除しようと思ったら排除できるのです。けれども、ハトとタカを排除しないばかりか、ハトとタカの苦しみを自分の課題として引き受けた。ここが大きなポイントだろうと思います。

さて、現代社会を見ると、今、排他的傾向が非常に強まっています。これは、例えば小学校・中学校のい

じめであったり、ヘイトスピーチであったり、あるいは国際情勢を見ると、アメリカの大統領の発言であったり。君たちも新聞や報道等で知っているかと思います。他者をないがしろにする、他者を攻撃するということ、このことが強まっています。今、私たちの社会で、他者を受け入れる広い心を培うことが強く求められているのではないかと思います。

ここに集ってくれている学生諸君は、１回生のとき必修科目で「仏教の思想」を習ったかと思います。現在１回生の人はその科目を受講していることと思います。講義の中で、「菩薩」という存在について先生から教えられたかと思います。菩薩というのは、仏教の中で理想的な人間、人間の理想体として掲げられます。もともとはお釈迦様が悟りを開く前の段階のことを指します。先ほどの話で言えば、シビ王が菩薩であるわけです。

仏教の歴史の中で、そうした前世のお釈迦様、つまり菩薩に倣って、この世で尊い行為をする、すばらしい行為をする、そういう人たちをも菩薩というふうに言われるようになりました。中でも、観音菩薩、あるいは弥勒菩薩、文殊菩薩といった理想的な菩薩というものを仏教では掲げます。この菩薩というのは本来的には、他者を悟りの世界に導く存在です。

菩薩のありようの前提として、他者と共に生き、他者のために生きる精神があります。他者の利益になることをする。これを仏教では「利他」と言います。普通は私たちは生きるというのは自分の利益になることが第一です。けれども、菩薩というのは、利他が第一になるのです。

今、現代社会は他者を排除する、自分にとって都合の悪い者、自分とは異なる価値観を持っている者をどんどん排除していく「排他」が強まっているのです。その排他とまったく対極にある、それが利他といわれるものです。その利他を実践する物語が次から次へと古代インド文化圏で生み出されました。つまり、人間にとって生きる上で何が大切かという問いかけがあったのです。

私は、インドからシルクロード世界の仏教の歩みというものを専門にしています。あるとき、ひとつ気がついたことがあります。シルクロードと言われる過酷な自然状況下で、そこに多くのお寺が造られ、そして仏教の芸術作品がたくさん生み出されました。その中には、先ほどのシビ王物語と同じような物語がたくさんあることに気がつきました。一つだけ例を挙げます。

これもお釈迦様の前世の物語です。ある国の王子として生まれていたお釈迦様の前世の物語。あるとき、その王子が森の中に入ったら、飢えたトラの親子がいたというのです。このままではもう死んでしまうというので、王子は自分の体をトラに食べさせたのです。今ご覧いただいているスライドで、横たわっているのが前世の釈迦である王子です。そして、王子の身体の上にトラがいます。別の作例をお見せします。これも同じ物語です。ここでは王子は頭を下にしてまっさかさまに落下する様子と、自分の身体をトラに食べさせるシーンが描かれています。

こういう話がシルクロードに多く造形作品として壁画に表現されています。これは「捨身飼虎」の物語としてよく知られていますね。飢えたトラに身を与える王子の話は皆さん方も中学か高校のときに日本史の教科書で見ているはずなのですね。このスライドがそうです。法隆寺に玉虫厨子というものがあります。そして、四面のうちのひとつに今の飢えたトラに身を与えた王子の話が描かれています。それも先ほど紹介したシルクロードの壁画と同じように頭をまっさかさまにして落下して、そして下で飢えたトラに自分の体を食べさせる構図となっています。これは強烈な話ですよね。こんなことを私たちはできっこありません。

けれども、こういう話の中に人間として生きていく上で大切なことを見いだした人々がいるわけです。とりわけ、権力を持っている人たちが、逆にこういう話に共感を寄せたのです。玉虫厨子は聖徳太子ゆかりの法隆寺にあるわけですね。

先ほど利他ということを言いました。他者を利する。この発想はインドから中央アジア、さらには東南アジア、そして中国、朝鮮半島、古代日本へ伝わりました。仏教を伝えたのは、通常、お坊さんが伝えたというふうに理解されていると思います。もちろんお坊さんは重要です。けれども、こういう利他の話は時の権力者が非常に心を寄せたわけです。なぜか。他者と壁を作ると、そして他者を排除するというようなあり方は、争いになる、戦争になる。和を重んずる政策を仏教から学びとったのです。

和というものを構築するには、何が大切か。今、世界を見渡せば、紛争が続いています。けれども、仏教を必要とした地域は、かつて戦乱が絶えなかった地域、かつて戦争をやっていた民族、その中の一番強い権力

者がこのままではいけないという意識を持ったとき、そこに和が実現します。その和を実現させる大きな力になったのが、先ほどの仏教の中の利他の話です。つまり、かつてのお釈迦様の前世のような王子であったり、王であったり、他者を救済するということに力を発揮したその物語の主人公と同じような精神を体得する。それを理想としたのです。

今、法隆寺の作品を紹介しました。法隆寺は聖徳太子ゆかりの寺です。聖徳太子十七条憲法第一条は何か。「和をもって尊しとなす」。第二条は「篤く三宝を敬え」。三宝というのは、仏・法・僧。それはつまり仏教。仏教を敬うことで和を構築することができるという確信を聖徳太子は示しているのです。

さて、今、お釈迦様の前世の物語を紹介しましたが、到底私たちにはできない行為ですね。しかし、そこから学びとろうとした人たちがいる。どういうことが学べるのか。それは、相手へのいたわりであり、相手への思いやりである。先ほど言いました、自分と他者、他人というものをともに命あるものと捉える発想ですね。

シビ王の話であったり、捨身飼虎の話であったり、非常に過激な話です。けれども、そこにあるエッセンスは自分の命と他者の命は等しいということです。仏教を学ぶということは、これまで私たちには見えていなかった世界を見させてくれる。異民族がたくさんいるところで、実は人類というのは戦争ばかりしていたわけではないのです。戦争の愚かさに気づいた人たちがいるのです。異民族ひしめくシルクロードで、なぜ仏教が必要とされたのか、いま一度考えてみる必要があると思います。

そして、先ほど申し上げた数多くの仏教芸術の中で、菩薩の物語が多数作られた。その菩薩というのは一切衆生の安寧を願っています。衆生というのは命あるものという意味です。だから、菩薩の目指すのはすべての命あるものの安らぎということです。その菩薩の心をくみ取った時の権力者は、異民族と共存する道を考えたわけです。

本学の学生さん達は「仏教の思想」の講義で、龍谷ミュージアムに行かれたかと思います。その２階に常設をしてある壁画は、中国のトルファンにあるベゼクリク石窟にかつて表現されていた仏教芸術です。今、現地では失われています。それで、失われた壁画を龍谷大学の理工学部と文学部の有志が復元をいたしました。もとの姿に復元したのです。お釈迦様の前世の物語がずらりと並んでいたのです。これはかつて西ウイグル王国の王が作らせた壁画であるということが分かっています。

このような物語を通じて、私たちはそこから何を学ぶか。他者を大切にするということは分かっていても、どこまで行っても私たちは実は自分中心なのです。そんな自分を省みる。常にわが身を省みるというのが実は1639年に創設された龍谷大学の根底にあるものです。自分自身というものを、私たちはよく分かっていないまま生きています。自分のことは自分が一番よく分かっている。例えば親から何か言われる。自分のことは自分が一番よく分かっているからと言って、親に口答えした経験はあるかと思います。

でも、私たちは自分の目で自分の目を見ることはできますか。右手で右手をつかむことはできますか。巨大な力を持っている巨人は、自分で自分の体を持ち上げることができますか。できないのです。人間はそれ自体では人間を捉えきれないのです。人間が抱えている課題というのは、人間は人間の何たるかを知らずして解決できないのです。つまり、私たちが生きている、常識を持っているこの世界を超えたところから自分自身を照らすということが必要なのです。「仏教の思想」で皆さん方が学んでいることは、阿弥陀仏の誓願を通して自分を省みるということです。龍谷大学の建学の精神に関わることです。

2004 年から、私は毎年アフガニスタンというところに出かけていました。遺跡の調査をしに行ったのですが、アフガニスタンというと、自爆テロのイメージを持っておられる方が圧倒的多数だと思うのですね。危険なところ。実は、紀元前のころから危険であり続けています。紛争が行われていました。けれども、いまご覧にいれているこの穏やかな顔の仏像はアフガニスタンで作られました。つまり、仏教を必要とした人たちがいたわけですね。

ブッダの言葉を一つだけ紹介します。ここに書いてありますとおり、「怨みに報いるに怨みをもってしたならば、ついに怨みのやむことはない。怨みを捨ててこそやむ。これは永遠の真理である」。つまり、やられたらやり返す、そんなことを続けていたら永遠にそれが続いてしまうと。つまり、これは報復の愚かさと

いうものを紀元前５世紀に既にブッダが指摘している。

さて、現代社会はどうでしょうか。アフガニスタンの中でも日本人に一番有名なのは、かつて大仏が建っていたバーミヤーンだと思います。ここに西大仏、55 メートルの大仏がかつて建っていました。ここに東大仏、38 メートルの大仏がかつて建っていました。「建っていました」と過去形で言わなければならないのが非常に悲しいです。2001 年に、二体の大仏はダイナマイトで過激派の手によって爆破されてしまいました。

遺跡の調査に行ったとき、バーミヤーンでひとりの少年に出会いました。あまり空気の入っていなさそうなサッカーボールを蹴っていました。ボールで遊んでいました。けれども、よく見ているとボールを蹴るたびにひっくり返るのです。少年は片足でした。地雷で左足を失ったと、そばにいる人に教えられました。けれども、足を失っても、毎日サッカーの練習をしているのだそうです。前のほうに石を置いて、それに向けてボールを蹴る。ボールを蹴っては転ぶ。そして、また立ち上がる。もう着ているシャツもぼろぼろでした。そばにいた私のガイド役の人が、彼はサッカー選手になるのが夢だ、と教えてくれました。片足を失ってしまっているのです。どんなにつらいか。けれども、目がらんらんと輝いていることに私は非常に不思議な感覚を持ちました。本来なら、地雷を埋めた民族に対しての怨念であったり、あるいは義足を買ってほしい、でも貧しいから買えない、そういう気持ちであろうと、こちらが勝手に思っていました。

けれども、彼は黙々とボールを蹴っては転び、蹴っては転び、それも毎日やっている。彼は絶望に沈んでいるわけではない。そばにいた人から、この少年は父親の跡を継いでジャガイモ畑を経営し、稼いだお金で義足を買う計画を立てている、彼は夢を諦めていないと教えられました。逆境の中でも前向きな人はいます。

これからお見せする写真は、これもアフガニスタンへ行ったときの１枚のスナップ写真です。アフガニスタンの中でも最も貧しい地域でひとりの少年と出会いました。少年が小馬に乗っている。後ろに女性がいるのですね。アフガニスタンの成人女性は顔を人目にさらしません。黒い布をすっぽりかぶっています。女性は少年のお母さんでした。お母さんをこれから病院に連れていくところなのだと少年は言いました。貧しい地域です。まばらに土でできたお家が点在するだけです。そこには電気もガスもありません。少年はこれから３時間以上かけて病院へ母親を連れていくと言っていました。

アフガニスタンというと自爆テロのイメージ、怖いイメージがあると思います。けれども、そこに生きている人々は君たちと同じように平和を望み、そして親を大切にするという人たちが圧倒的に多いのです。そこにはごく普通の暮らしがあるのです。でも、私たちは、先入観で勝手にそこが危ない地域、そこに住んでいる人たちは危ない人という先入観を持ってしまうのですね。

さて、龍谷大学の学びというのは、先ほど申し上げましたように、自分を省みて大事なことに気づく、あるいは目覚めていく。例えば、今ここの教室に座っていらっしゃる誰もが、自分ひとりの力だけでここに座っているのではないはずです。親の支えがあったればこそ、友達の支えがあったればこそ、多くの支えの中で私たちは誰もが生きています。多くの恩恵を被っているということに気づく、そういう気づきがあれば行動が変わってきます。

大学で学ぶ。いろいろな教えに触れる。そうした教えに照らされて見えてくる世界というものが確実にあるはずです。今まで自分が気づかなかったことが学べるというのが、私は人間の中での最大の幸せだと思っています。

今、必要なのは、自分の愚かさに気がついていくこと。そして気づいて目覚めていくことです。それを私は宗教的情操というふうに呼びたいと思います。それは、人間の愚かさに気づくことに通じます。高度に科学技術が進展しても、いまだに紛争がやまない。そして、至るところで弱い者に対する差別というものがある。けれども、そのことに気づくことによって、今、私は何ができるかということを考えるようになるのが人間の素晴らしさだと思います。

「仏教の思想」で慈悲ということを習ったかと思います。やさしく言えば他者への温かな共感ということです。私たちがこれから目指すべきは、最初に言いました利他的な人間になっていくということ。自分さえよければいいのだ、何事も自分を中心にして、というようなことではなくて、他者への温かな共感というものを持って生きていく。そして、大学で学んだ後は、皆さん方は社会に出られるわけです。社会で仕事をする。仕事ということを、よく考えてみてください。あ

らゆる仕事は他者の幸福に通じているのです。食品関連の仕事であれ、流通関連の仕事であれ、あらゆる仕事は他者のためになされるのです。ただ給料をもらって、はいそれでＯＫというような生き方ではなくて、自分の仕事というものが他者の幸福に繋がるということを意識する生き方。このことはぜひ、心の隅にとどめておいてほしいと思います。

今、障がいを持っている方々が前のほうにお座りになられています。私たちの顔が違うように、体つきが違うように、障がいというものを特別視する必要は、私はないと思っています。ともに命あるもの、その中の誰もが命を持っている存在というレベルで他者と接する。障がいのある・なしを超えて、すべての人々が共生する社会の構築というものが、今切実に求められています。つまり、この龍谷大学というものを一つの大きな社会に見立ててみると、そこには健常者もいれば、障がいを持っている方もいる。その皆さん方が共に生きていくということ。このことを意識することが大切です。

私は、障がいというのは、むしろ社会が持っていて、障がい者の方々が直面している社会の障壁こそが本当の障がいではないかと思います。その障がいを持っている方が今何が必要か、ちょっと私たちが思いを馳せる、他者のために考えるということをすれば、障がいを持っていらっしゃる方の苦しみというものが他人事ではなくなるはずです。そして、一番恐ろしいのは無関心。おそらく障がいを持っていらっしゃる方にとっても、周りの人の無関心というのが一番の壁になっているかと思います。

共生、「きょうせい」あるいは「ともいき」、今日のシンポジウムのタイトルになっています。そして、龍谷大学が長年にわたって「ともいき」ということを言い続けています。私はこれを単にスローガンで終わらせたくはありません。そして、共に生きるといっても、言葉だけのものにするのではなくて、ともに心と心が通い合う。つまり、「共生」から「響生」へ。響くということです。響き合う、お互いの心と心が通じ合う社会というもの、そういう方向へともっていく必要があるのではないかというふうに思っています。

江戸時代の良寛という有名な僧侶がこんな言葉を残しています。「いかなるが苦しきものと問うならば、人を隔てる心と答えよ」。どのようなことが苦しいのかと問われたならば、人を分け隔てる心と答えなさいと。こんな言葉を残しています。人を分け隔てる心というのは、これがまさしく人を差別する心であったり、人を見下す心、隔たりというものですね。それを取っ払う。心の隔たりを取り払うということが、支え合うということだと私は思います。心と心を通わせる習慣を培っていくことは、他者の心に共感するということです。これから非常に大切になってくるのは、「共感する」ということだと思います。

今日、皆さん方に一つだけ仏教の言葉を知って帰っていただきたい。「随喜」という言葉がそれです。随喜というのは、もともとはブッダや菩薩の善なる行為を褒めたたえるということです。そこから、他者の喜びごとを心の底から喜ぶことという意味で使われます。例えば、友達が結婚すると、「ああ、本当におめでとう」と言うことですね。他人のうれしいこと、喜んでいることを自分自身が心の底から喜ぶ。実はこれがなかなかできないのですよ。４回生の人で、友達は就職がどんどん決まっていく。口では「おめでとう。決まってよかったな」と言っても、心の中では「何でおまえだけが決まるんや」というような恨みつらみの気持ちというものがわき出てくる。

人が喜んでいること、例えば誕生日でもいいです。それを心の底から「おめでとう」と言ってあげる。お互いが気持ちよくなれます。今度、宗教部が成人の集いというのをやります。成人式を迎えた人たちを心から喜んであげるいい機会です。

そういう喜ぶ気持ちがあるときというのは、自分の心の中のわだかまりというものが取り払われている状態なのですね。だから、日常生活の中でちょっとしたこと、今までできなかったことができたということを喜んでいる人がいるとしたならば、そのことを「ああ、本当によかったね。よく頑張ったね」と言って、ともに喜ぶ。これを習慣にすると、随分と社会は変わっていくと思います。だから、本学の宗教行事はどんどん出席してください。

先日、このシンポジウムを準備する打ち合わせのときに、経済学部の学生だったと思いますが、ノートテイカーは楽しいということを言っていました。今日、おそらく後で発表してくれるのだと思いますけど、これを聞いたとき、私は本当にこの大学で仕事をさせてもらってよかったなという気持ちになりました。難聴の学生のためにノートをとるということですね。これ

は本当は大変なことですよ。けれども、それが楽しいと言うのですね。私はそういう学生さんが増えることを願っています。

最後に、この大学は親鸞聖人の、つまり浄土真宗の教えというものを建学の精神にしています。私は、親鸞聖人の言葉の中で、「自然法爾」という言葉が好きです。自然というのは、皆さん方は nature の訳語として使っていますよね。草や川や木ですね。でも、自然という言葉は仏教語でもあるのです。本来は「じねん」と読みます。それを nature の訳語にあてはめたのですね。

さあ、今、この地球で何が大きな問題になっていますか。自然破壊、環境破壊。人間を中心にして考えるから、自然は人間のためにあるのだ、征服されて当然だというような考えがどんどん行き渡ったがために、人間は自分の暮らし、住んでいるこの地球を破壊しつつあるのです。本来、この自然というのは、「おのずからそのようになる」という意味です。ありのまま、あるいはあるがままということなのですね。

そして、法爾というのは、真理がそのままに顕現するという意味です。浄土真宗というのは、阿弥陀仏の働きというものがすべての人々にいつでも、どこでも、誰の上にも及んでいる。ここに隔てはないのです。だから、今のまま、あるがままでいいのですよという呼びかけがなされるのです。「自然法爾」。つまり、今困難を抱えていらっしゃる方に向かって、今のまま、あるがままのあなたでいいのです。賜った命、精いっぱい生き抜いてください、との呼びかけがなされているのです。

私たちは今、いろいろな人といろいろな相手と関わりながら生きています。そして、その相手に心を開くということで確実に自分の世界は広がっていきます。私たちはどうしても、内に内にこもってしまう。自分の考え、自分の価値観の中で物事を見ようとするのですね。今、困難な状態を抱えていらっしゃる方は、自分は弱い存在だというふうに思っていらっしゃるかと思います。「弱い」というのは、これは克服するべきものでしょうか。耳を澄ませるべきものだというふうに私は考えています。弱さにも力はある。例えば先ほどのノートテイカーの人が楽しいというのは、お互い心が触れ合っているから。障がいを持っている方からいろんなことをやはり学びとることができるのですよね。強い力を持った強権政治が持つ力とは異質な力というものが「弱さ」の中にある。自分の中にある弱さに耳を澄ませ、そして困難を抱えていらっしゃる方の弱い立場ということを知っていく。そういうところから、私たちの学びを再スタートしていきたいというふうに考えています。健常者であっても、自分の中にある弱さというものを自覚していく。そして、弱い立場にある人に共感していく。感応していく。それが「思いやりを育む」ことだと思います。

多くの学生が集うキャンパスです。その多くの学生が集うキャンパスで、思いやりの心を育んでいく。そういうキャンパスにしていきたいと私は考えています。私の話は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。